

❖ ❖
絵図にみる近世

津軽十三湊の呼称

長谷川成一

近世津軽地方における十三湊の呼称が、訓読み「とさみなと」か、音読みの「じゅうさんみなと」かについては長い間論争が続いていたが、拙著『近世国家と東北大名』（吉川弘文館、一九九八年）第三部第一章の「十三湊の地名呼称」において決着がついており、十八世紀までは中世以来の呼称「とさ」が、領内で広く通用していたことが判明した。

拙著では、十三の訓読み「とさ」が音読み

「じゅうさん」に変更したのは、十九世紀に入った享和三年（一八〇三）、江戸幕府が全国的に実施した、郡村仮名附帳編修事業においてではないかという結論に至った。本稿の理解を助けるためにその経緯を簡単に述べておこう。

弘前藩では、同年六月、幕府の布達に従って「陸奥国津軽郡村仮名附帳」（弘前市立図書館蔵）を作成し、同藩江戸屋敷の雨森権市が幕府勘定所へ提出した。そこに記載された十三は、「十三村」、「十三町」、「十三湊」、遠見番所として「十三浦」とすべて音読みの記述になっていた。このうち幕府では各藩から提出された郡村仮名附帳を精査して、その間違いを指摘して再調査を命じた。弘前藩の場合、「享和三年郷村仮名附帳公迎御書出之節江戸表調違并村名違之儀二付往復書簡留」（同前）を提出したが、右の史料によれば、「十三村」以下の「十三」に関わる地名は再調査の対象となっていない。ここに幕藩体制下において、「十三」は音読みの「じゅうさん」が正式な地名呼称として、幕府も弘前藩も双方認める呼び名として確定した。

右の結論にいささかも変更はないが、紙本・着色、制作者不明、年不詳「津軽之図」（市立

函館図書館蔵 資料番号〇〇二九一〇〇一九―一六〇〇一）は、十三の地名についての考察を深める上で示唆に富む絵図である。拙著でも当絵図の十三について簡単に触れたが、本稿では図自体の特徴を踏まえて、十三の呼称についての新たな知見を積み重ねることにしたい。

当絵図は、津軽領内の街道、主要な沢筋と沢名、各村の戸数、主な山岳、藩境を接する秋田・津軽両領の沢筋と沢名、弘前城下を除いた領内の主要寺社などを描写した絵図である。図自体はデフォルメして描かれており、地理的な位置関係は、正確さをかなり損なっている。このことから、右図は正確な地形、位置関係を示すのに重点があつたのではなく、津軽・秋田両領の藩境付近の沢筋を描き、前述の村の戸数や地名などの情報を入れ込むことに主眼を置いた絵図と見なしてよからう。年代は、図中に「黒石城下」とあることから、旗本であつた黒石津軽家が、文化六年（一八〇九）、本藩弘前藩の運動によって大名に取り立てられた時期以降と考えて支障なからう。それ以前には、各絵図に「黒石城下」の記載は認められず、「黒石陣屋」もしくは、「黒石」と記されていた。したがって本図は、



図 津軽之図（市立函館図書館蔵）

十九世紀前半から幕末にかけての時期の津軽領を描いたと考えられる。

さて図中の地名や寺名などは、多くがカタカナ・ひらがなで記されているのも特徴として挙げられる。さらに、弘前市郊外の、オシラ様信仰で有名な久渡寺（くどじ）は「九堂寺」、岩木山は「岩城山」、鯉ヶ沢は「アシケ沢」など、単純な表記の間違いとはみられない表記があり、それらは津軽領の人々が音声

で発した地名を、漢字もしくはカタカナ・ひらがなで図中に表記しようとしたのではなからうか。しかも、従来の絵図などには見かけない地名表記の仕方である。図の制作者が領内出身者であれば、おそらく地名をこのようには表記しないと思われるので、当図の制作者は津軽以外の他領出身の人物ではなからうか。他領の出身者が、津軽領内の地名を音声で聞いてそれを図中に表記した場合、方言はもちろん当時通用していた地名呼称が図中に記録されることになったと考えられる。当図は、この点において興味深い情報を我々に提供していろいろ。

本稿の主題に則して、図中で特に注目されるのは、現十三湖^{じゅうさんこ}の付近、「湯」とある箇所、つまり現在の北津軽郡市浦村十三地区^{しゅうむらじゅうさん}に「土佐湊 十三湊トモ云」の記載がみえる（写真参照）。この記述からすると、当時の十三湊の呼び名は訓読み「とさみなと」以外は考えられない。右絵図は前述のように文化六年以降の制作であることが判明しており、享和三年、弘前藩では十三を「シウサン」と称するのだと幕府に報告していたが、領内では通常、「とさ」の音で人々に呼ばれていたことが、当絵図の表記によって分かった。音読み

「じゅうさん」ではなく、「とさ」の訓読みこそが領内外の人々に広く認められていた地名であつたようだ。幕府・弘前藩ともに音読み「じゅうさん」を公式に十三の地名として定めたにもかかわらず、領民の間では中世以来の「とさ」が地名呼称として行きわたっていたのであろう。これが音読み「じゅうさん」へ完全に転化するのには、近代に入って皇国地誌編纂の一環として行われた「新撰陸奥国誌」においてであり、ここでは一貫して「じゅうさん」と記述されている。

現在、「十三湖」の小字が「土佐」であることは、当絵図の表記と深く関わっている。

音読み「じゅうさん」は幕藩体制と近代国家が定めた呼び名であるにもかかわらず、民衆の間では訓読み「とさ」が簡単に消え去らず、本来の地名「とさ」の痕跡が小字としてこのような形で現代に残ったのである。

（はせがわ・せいいち 弘前大学人文学部教授）